進化宣言！
電撃文庫
FIGHTING
ファイティング
フェア

電撃文庫の大人気作品『エロマンガ先生』の書きトろし短編小説

3号連続掲載の最後を飾るヒロインは、年下の先輩、千寿ムラマサ！

原作コンビとコミカライズ作者がコラボレーション！

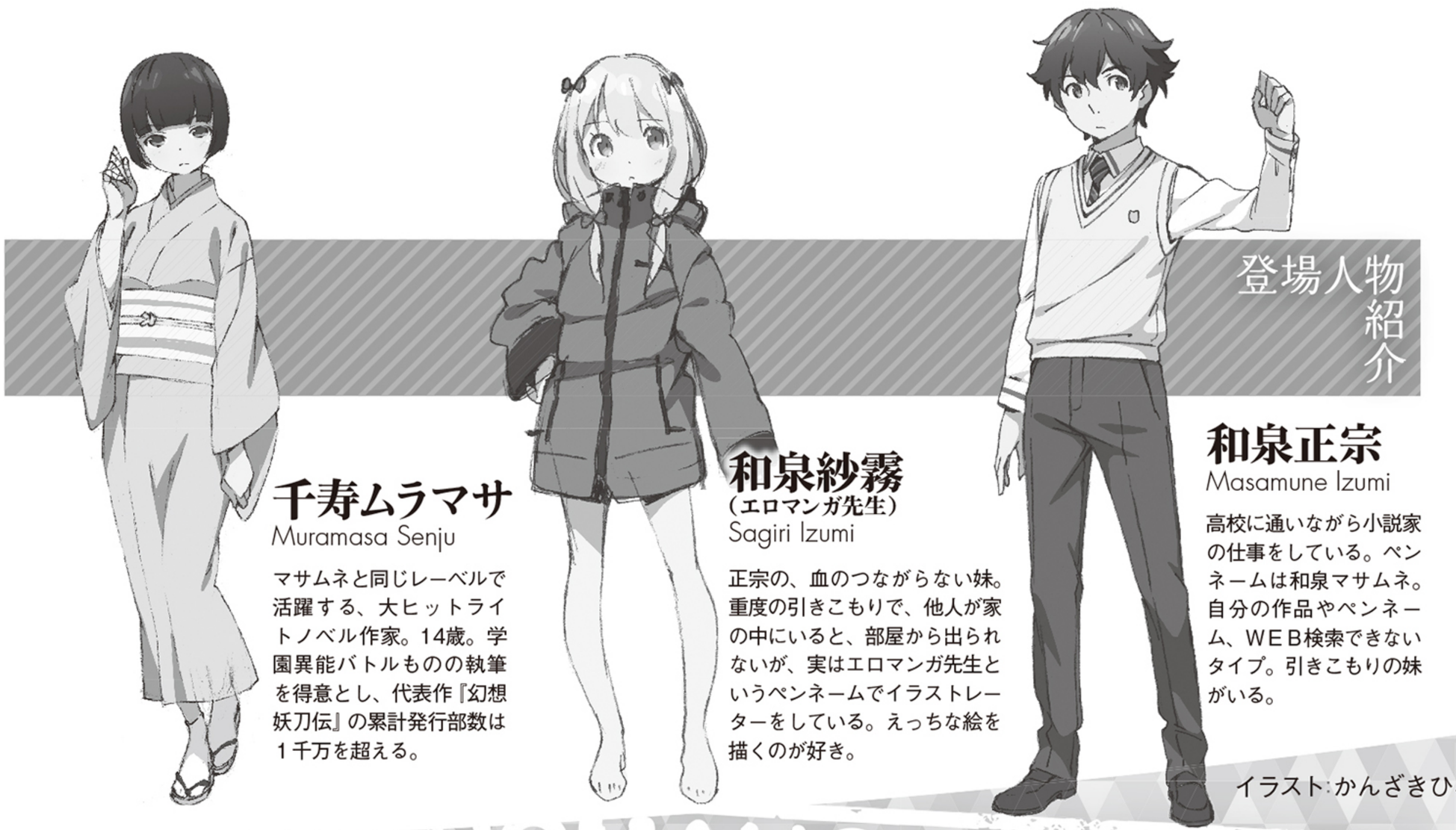
伏見つかさ　扉イラスト ❖ かんざきひろ
挿絵イラスト ❖ rin

ムラマサ編

3号連続掲載第3弾！

エロマンガ大王

俺の『年下の先輩』について、話そうと思う。
千寿（せんじゅ）ムラマサは、かつて、和泉マサムネの天敵だった。
俺とよく似たペンネーム、よく似た作風、よく似た速筆（スキル）、六十倍の売上実績を持つ、俺よりもさらに若い、レーベル最年少のライトノベル作家。
累計部数一〇〇〇万部オーバーの怪物。
新人時代の和泉マサムネは、なにかと『彼』と比べられ、たいそう風当たりの強い日々を過ごしたものだ――心にいくつものトラウマを刻まれ、いくつもの新企画を潰され、作家廃業の危機にさえ追い込まれた。
恥ずかしながら、『ムラマサ死すべし』『あいつさえいなければ』などと、恨んでいた時期もある。
さて、そんなムラマサ先輩と、つい先日、俺は、初めて対面したわけだ。
初めて顔を合わせ、会話をし――激突した。
それは、ここで語るべきエピソードではないし、むちゃくちゃ長くなるので割愛するが、このときを境にして、俺とムラマサ先輩の関係は、大きく変わった。
俺の天敵、年下の先輩――千寿ムラマサは、着物が似合う、十四歳の、女の子だったのだ。
ムラマサ先輩とは、どんな人なのか？あらためてそう聞かれると、ちょっと困ってしまう。
そうだなぁ。これは、この間、先輩と一緒にファミレスに入ったときのことなんだが――
「ムラマサ先輩、注文なにがいい？」
俺が対面の先輩に話しかけると、着物姿の彼女は、
「……」
まったく返事をしてくれなかった。じっと厳しい顔で虚空をにらみつけたまま、綺麗な姿勢で固まっている。
「先輩？　おーい、先輩？」
目の前で手を振っても、反応なし。目を開けているのに、ぴくりともしない。
色白で、端正な顔立ちなものだから、蝋人形になってしまったんじゃないか――なんて、ありえない想像をしてしまう。
「……せんぱ――」
「よし！」
「うわ！」
先輩の眼に光が宿った――と思いきや、いきなり大声を出す。俺はびっくりして、ひっくり返りそうになってしまう。〝静〟から〝動〟へ――イキイキと活動を始めた彼女は、ぐるりと首を回して、俺を認めるや、
「ん？　マサムネ君、どうした？」
「それはこっちの台詞だ。どうしたんだ、いったい。いきなり大声を出してさ」
「ああ――決めたぞ、マサムネ君！」
「……お、おう……注文を決めるくらいで、なにをおおげさな」
ムラマサ先輩は、ハキハキした口調で、



イラスト：かんざきひろ

「私は、恋人を殺す！」

「楽しそうになに言ってんだ先輩！」

ざわっ……ざわざわ……！

やだ、殺すですって……痴情のもつれかしら……？

ホラ！　周りのお客さんが、何事かって目でこっちを見てる！

先輩は、きょとんと首をかしげて、

「なにって、私がいま書いているバトル小説の話だが？」

「知ってるよ！　ヒロイン！　主人公の恋人な！　でも、他の人にはそう聞こえてねーから！」

「止めてくれるな！　熟慮の末の結論なんだ！」

いや、俺が止めてるのは、あんた自身の奇行……。

そこで先輩は、がらりと凶悪な形相になった。

初めて会ったときの、あの悪役オーラたっぷりの表情である。

「フン……こうなったからには、やつはもう殺すしかない！　できる限り残忍な方法でだ！

——むしろ、君を凶器の専門家と見込んで、アドバイスをもらいたい。人体を派手に八つ裂きにするためには、どのような刃物を使用するべきだろう！　和泉先生！」

「マジでやめろ！　ここ、俺んちの近所なんだぞ!?」

いかん。

先輩の魅力をアピールしようと思ったのに、なんか違うところが目立ってしまった。

えーと、そうだな……。先輩のいいところ……いいところ……うーん。

美人で格好良くて、着物がよく似合ってて、透き通るような肌の色とか、色っぽい首筋とか……あ、あと意外と着やせするタイプで胸が——って、外見ばっかりだな！

脳内の妹から『兄さんのえっち』と言われてしまったので、違う方向に行こう。

ものすごく小説を書くのが上手い——これはもう言ったか。

なら、これだ。

千寿ムラマサ先輩は、とんでもなく大物なの

だ。
あるとき、こんなことがあった――
俺んちのリビングで、先輩と一緒にテレビを見ていたときのことだ。
「先輩、このドラマはどうだ？」
「普通」
「……そっか。じゃあ、さっき見た魔法少女アニメは？」
「普通かな」
「な、なるほど……じゃあ、その前に見た、特撮は？」
「舞台がうちの近所だった」
「……」
解説しよう。
ムラマサ先輩は、本屋に売っている小説を読んでも、一部の例外を除き、まったく面白く感じないという〝病気〟なのだ。
この話を聞いたとき、俺は内心こう思った。
――小説以外だと、どうなんだろう？
というのも、クリエイターって、良くも悪くも色んな作品の影響を受けて、学び、成長していくものじゃんか。もちろん影響を受けるのは、自分が好きな作品たちなわけで。
あんなに面白い小説を書く先輩が、〝自分が楽しめるわずかな例外〟だけに影響を受けてきたとは、ちょっと思えないのだ。
で、本人に聞いてみたんだよ。そしたら、こんな答えが返ってきた。
『別に、まったく楽しめないわけじゃない。それに、私が個人的に楽しめるかどうかと、その作品から学べるかどうかは、また別の話だ』
自分が面白いと思わない作品からも、学んでいる、ということなのだろう。
素直に感心したので、俺も見習いたい。
『――とはいえ、正直、ちょっとした食わず嫌いみたいになっているところがあるんだ。アニメにせよ、映画にせよ、一定時間、画面の前に居なくてはいけないところが苦手でね』
すぐに小説のネタを思いついて、この前のファミレスんときみたいなことになるものな。
そうなったら、映画の内容など、吹っ飛んでしまうに違いない。
試すまでもなく、千寿ムラマサと映像作品の相性は悪そうだ。
『そういうことなら、先輩、うちで観てみる？ 資料用のBD（ブルーレイディスク）作品が、けっこうあるんだ』
『――君が、となりで一緒に観てくれるのなら』
先輩の付けた〝条件〟については、よくわからんのだが……。
そういうことになった。
そんで、さっきから、先輩とふたり、ソファーに並んで座って、映像作品を観まくっていたってわけ。
見てのとおり、先輩の反応は芳しくない。
その後、数時間ほど視聴を続けてから、俺はこう切り出した。
「やっぱ、ダメか。どれも俺が面白いと感じた作品なんだけど」
「いや、そうでもない。さほど悪くない作品もあったぞ？」
「マジで？」
あの先輩が、『悪くない』って言うほどのアニメ？
「どれだ？」
「いまテレビに映っているアニメ」
先輩は、何気ない仕草で、テレビを指さす。
俺は、彼女の指先を目線で追い、
「……」
ごしごし。腕で目をこすって、もう一度確認。
間違えるわけもない――俺が自分で録画して、再生して、先輩に見せたものなのだから。
このアニメは――
「うん、なかなかのものじゃないか。まさか、私がそう思えるような作品が、いま、まさに放映中だったとはな。知らなかった。ラノベが原作ならすぐに読んでみたい。なんて作者だ？」
「あんただ、あんた」
「えっ？　あんた氏という名前？」
「このアニメの原作者は、先輩だ！」
「私？」
ぱちくり、と瞬きする先輩。
これ……！　この人！　自慢するためにトボけてるわけじゃないんだぜ⁉　信じられるか⁉
本気で言っているんだぜ⁉　信じられるか⁉
俺も最初はびっくりしたよ――なにせこの人、小説家のくせに、ついつい最近まで、自分が書

EROMANGA-SENSEI

いた小説のタイトルを知らなかったんだからな。
「そうだよ！『幻想妖刀伝』！　この前新刊脱稿したばっかだろ!?　タイトルも覚えたって言ってたよな!?」
「『幻刀』？　このアニメがか？　ふぅーむ、確かに似ているような気もするが……内容が違うじゃないか。私が書いたのは、こういう話じゃないぞ」
「あんたが監修してねーからだろ！」
　このアニメは、ムラマサ先輩が書いた原作小説と、登場人物もストーリーもほぼ同じなのだが、ちょっとしたストーリー解釈の違いであったり、キャラクターの性格・台詞の違いであったり、重要エピソードのカットであったり――そういったものが積み重なって、結果『原作とは別物』になっている。原作ファンからの評判もすこぶる悪い。
　まぁ、メディアミックスではよくある現象なのだが。
　原作者なんだから、自分の作品が基になっていることくらい気づけよと思う。
……いや、原作者だからこそ、ちょっと別物になっただけで、自分の作品だとは認識できなくなってしまう――のかもしれない。
『原作とは別物』――原作レイプをぶちかまされた連中が、強がりで言っているわけではなく。
　本当に、わからなかったのだ、この人は。
〝え？　コレ？　どこが？〟――みたいな。
……だとしたら、このあと、どうなるんだ？

　自分の著作が『別物』になったことを、ここで初めて知ったムラマサ先輩は――どんな反応をするのだろう？　……怖いな。
　俺は、冷や汗をかいて、先輩の顔を見た。
　彼女は、きょとんと首をかしげて言った。
「ふぅん、そういうものか」
　うわぁ……すっげー、どうでもよさそう。
「監修ね――私が、小説を書く時間を減らさなくちゃいけなくなるような仕事を、やるわけないだろう」
「まぁ、先輩は、そう言うわな」
「ああ。しかし――『幻刀』のアニメって、いま放映中だったんだな？」
「もう終わってるから。これ、録画だから」
　はぁ、と、俺はため息を吐く。
　この人のファンが聞いたら、盛大にずっこけてしまいそうだ。
　千寿ムラマサ先輩は、小説を書くこと以外、ほとんど興味がない人なのである。
　夢は『世界で一番面白い小説を書くこと』。
　だから……メディアミックスへの対応が、こうなってしまうのも、無理はない。
　石ころ同然の原作者なのであった。
　そこでアニメのAパートが終わり、『幻刀』メインヒロインの声で、こんなCMが流れた。
『PS3「幻想妖刀伝」は、原作者完全監修シナリオで好評発売中！　皆の者、絶対に買うのだ！』

「嘘つけぇ！」
　俺は、大声でテレビにツッコミを入れてしまった。
　とまぁ……お聞きのとおり、大物といえば大物だろう？
　うむむ……どうも先輩のイメージが、上がった気がしない。
　つーか俺、先輩と会うたびに、大声でツッコんでばかりのような……。いや、違うな。そうじゃないときだってあったはずだ！　思い出せ、俺……！
　そう、あれは、九月。
　夏休みが終わり、めでたく『和泉マサムネの新刊発売日』を迎えた直後の話――

　その日、先輩は『とある理由』で、『エルフと一緒にエロマンガ先生と会う』ため、俺んちにやってきていた。
『とある理由』については、ここで語ることはできない。
……推察くらいはできるだろうが、忘れてくれるとありがたい。
　さて、ともかく、俺は先輩をリビングに通した。
　ちなみにエルフは、まだ来ていない。
「先輩、リビングで待っていてくれるか？」
「もちろん、いいとも。ああ、お構いなく。放っておいてくれれば、私はここで、何時間でも小